



ブラインドサッカー

視覚障害者への理解を 鳥栖で体験会 /佐賀

毎日新聞 2015年11月24日 地方版

パラリンピックの正式種目になっているブラインドサッカーを通じて障害者理解を深める体験会が23日、鳥栖市藤木町の鳥栖商工センター多目的ホールであった。参加したのは県内の大学生ら20代中心に20人。いずれも視覚障害はなく、戸惑いながらも“見えない世界”のコミュニケーションの仕方などを学んだ。

多様な人たちが共存できる社会を目指す活動の一環。2004年に創設された九州唯一のブラインドサッカーチーム「ラッキーストライカーズ福岡」の選手らがコーチした。同チームはJ2アビスパ福岡の支援を受けているが、佐賀県内にはまだブラインドサッカーの拠点はないという。

ブラインドサッカーはフットサルコートでプレーし、ボールは音で位置が分かるよう鈴が入っている。チームはフィールドプレイヤー（FP）4人、ゴールキーパー（GK）1人、相手ゴール裏で声を出すガイド1人で構成し、FP4人は目が見えないことが原則で、国内ルールではアイマスクを着けた健常者でも出場できる。

コミュニケーション面では、見えない人でも分かるよう説明する技術が必要。体験会では、参加者がアイマスクを着けて目の見えない状態での情報伝達に徐々に慣れていきながら、最後はゲームも体験した。

ゲームは最初の1分だけ見える状態で行い、参加者はフットサルを楽しんでいたが、アイマスクを着けた途端に動きが鈍く足踏みしながらボールを探すようになった。サークルでフットサルをしている西九州大子ども学部4年の永尾優樹さん（21）もシュートを封じられ「何も見えなくて手探り状態でした」と戸惑っていた。

指導に訪れた九州ブラインドサッカー協会の渡辺修理事長（45）は「短時間でも経験すると、健常の子が点字ブロックの上に自転車を止めなくなる。サッカーは手段であり、次のステップに進むきっかけになれば」と話した。【上田泰嗣】